

チョモランマ峰にて1997

戸高雅史

K2峰遠征を終えた私はしばらくの間、その充実感の中にいた。そして三ヶ月が過ぎた頃、ひとつの山が私の心を捉えて離さなくなった。チョモランマ。ヒマラヤに通い出した頃からいつかは、と思っていたチベットからのエベレスト、すなわちチョモランマ峰へ。もし行くなら無酸素やアルパインスタイルで、と思っていた。ブロードピークの縦走やK2峰の無酸素登山でその夢がいつの間にか手の届くところに来た気がしたのだった。

ひとりで北西壁へ。最終的には'96の11月に決めた。遠征までの8カ月間、冬は国内の氷のルートに登り込み、富士山に通いつめた。そして最後にMt.デナリでトレーニングを行い遠征へ向けての準備をした。技術的・肉体的な準備はもちろんだが、今回は特に自己の内面的な深まりを大切にしてきた。トレーニングを終えタルキートナに戻った私は、水の流れのリズムに満たされたいと思い林を抜け広い河原に出た。その時、丁度デナリ、ハンター、フォーレイカーのやまなみに白夜の夕陽が沈むところだった。私は時を忘れ、その美しさの中に佇んでいた。すべてが調和の中にあるようだった。準備はできたと感じた。

7月10日、優美(妻)と共にカトマンズ入る。そして装備・食料の買い出しを終え、陸路にてチベットに入りザンムー、ニェラム、シガルを経て7月23日、標高5,150mのベースキャンプ(以下BC)に到着。そこで順応とヤクを待つため4日間滞在し、27日11頭のヤク・3人のヤク工とともにさらにアドバンスベースキャンプ(5,600m、以下ABC)へ向かい、翌28日に到着。丁度ロンブク氷河が左へと曲がる場所、西ロンブク氷河との出会いにあり、正面にチョモランマ峰北西壁が望める場所に私たちのABCを設けた。私たちとコックの個人テント2張り、キッチン1張り、計3張りのシンプルなベースである。氷河上ではなく土の上で暖かく、緑もあり北西壁の様子もよく把握できる申し分のないところだ。

さっそく、東側のチャングツェ(6,977m)へ登りながら順応を行う。モンスーン中で気温が高く雪の状態が不安定で雪崩の危険があり、少ないチャンスを利用しての順応行動となったが、ひとりっきりで山に入る気分はなんともいえないものだった。結局8月14日までかけ、6,900mまで2回到達し満足のゆく順応を行うことができた。その後、アタックへ向けての装備の点検等の最終準備を行う。今回は装備を徹底的に軽量化した。アタックではツェルトを使う予定でその重量は約200g。ザックも特注で作成していただき、約600g。ウェアも含めて数社のメーカーに大変お世話になった。今回は、完全なアルパインスタイルになる。8月から9月中旬までのモンスーン中の晴れ間(モンスーンブレイクと言われている)を利用してアタックを行う予定である。モンスーンブレイクとは南のベン

1. 登山記録

ガル湾から吹き寄せるモンスーンの気流が、西のアラビア海からの気流と丁度ヒマラヤの上空でぶつかり二つの前線が対峙することにより訪れる晴れ間のことである。資料によれば1週間から10日間は続くらしい。だが、必ずしもあるとは言えないようだ。ちなみにメスナーやロレタン・トロワレは8月下旬にチャンスをつかんで見事登頂している。

なぜ、この時期に？それはこの時期、北西壁は大量の雪に覆われ上部の岩場・ホーンバインクローワールも雪壁の登下降となり登りやすくなるから。特にアルパインスタイルや単独の登攀では持って上がれる装備に限りがあるのでノーザイルで登れば、よりスピードもあがる。ただし、このルートはこの時期取り付きから頂上まで常に雪崩の危険にさらされるため、雪がよく締まり、天候の安定したチャンスをいかにつかむかがポイントになる。しかも、陽が当たれば雪が緩みやすく雪崩の危険が高くなりラッセルで時間もかかる。そのため夜間登攀の方が具合がよく、できれば月の明かりを利用したい。以上の理由から次のようなプランを立てた。満月は8月16日。それまでに順応を終え、16日頃にアタック。チャンツェ西稜の麓5,900mにキャンプを設け、夜半にそこからアタック。夜通し登り続け、できれば雪が緩む午前10時頃までに7,800mの雪崩から安全な場所まで登り日中休憩、夜に登り出し頂上へ。下降はできるだけ同ルートを、どうしても無理な場合はノーマルルート（北東稜～北稜）を下ると。8月16日、降雪。雪が落ち着くのを待ち21日、ABCを出発。5,900mにキャンプ。翌22日、取り付きまでの氷河のルートのチェックを行い一旦5,900mのキャンプに戻り、夜半からのアタックに備える。だが、夜になると南からロー・ラを越えて湿った気流が入ってきて雪となる。この日は結局アタックをかけられず一旦ABCへ戻る。24日、再度アタックに向かう。5,900mのテントを北西壁の取り付き（6,200m）へと移し、夜半からのアタックに備え仮眠をとる。午後10時、シュラフを出る。外をみると満天の星。最高のチャンスになりそうである。ドキドキと鼓動が高鳴り、緊張してくるのがわかる。いよいよだ。コンロに火をつけ、大量に飲み物を取り食事をする。午前0時、準備完了。パラパラと音がする。もしやと外をみるといつの間にか星はみえなくなり、湿ったガスに包まれ雪が降っている。ABCの優美と交信する。ABCは天気がよく、チョモランマの付近だけ雲に包まれているとのこと。その上空には星が出ているようだ。もしかしたら湿った空気がこの谷間に垂れこめているだけなのかもしれない。だが、パラパラとおちる雪、そして高い気温にアタックをかける気になれず、1時間待機する。さらに1時間。状況は変わらない。さらに1時間。結局、午前4時になったところでアタックを断念。8千メートルより上の無酸素登山の厳しさがわかっているだけに自分の体調・山・天候等のフィーリングが噛み合わない限り中途半端にアタックにでる気にはなれなかった。午前7時、空は晴れ上がった。行けたのではないか？だが、時間が遅すぎる。とりあえず6,400mまでルートの様子をつかむため試登し、一旦ABCに引き返す。

次の悪天期をABCにてやり過ごし9月2日、6,200mのキャンプに入る。これが3回目だ。雪が緩み5,900mからは膝上のラッセルだった。仮眠をとってアタックに備える。夜半、また降雪が始まる。今

1. 登山記録

回は本格的な降雪となった。チョモランマ、チャンツェ、ノース・コルの斜面から雪崩の音がひっきりなしに聞こえてくる。3回目のアタックも断念。翌朝、ABCに戻る。

複雑な心境だった。

チャンツェでいい順応ができ気持ちも北西壁に集中していたのだが、やはりそんなに簡単にはいかなかった。肉体的にも精神的にも最高の状態に仕上げた山や天候とのフィーリングが合うチャンス待つ。ひたすら待つ。そんなアタックは私にとっては3回が限度だった。これで終わりにしてもいいかとも思ったが、やはり頂きへ向かって少しでも高く登りたいという気持ちが強く、ノーマルルートに変更してアタックをかけることにした。

9月12日、コックのドルジュに手伝ってもらい二人で北西壁ABCからノーマルルートのABC(6,400m)へ入る。そこにはすでにスイス、コロンビア、カナダ、アメリカ等7隊が入っており、にぎやかなテント村ができていた。アタックでも使う一人用テントを張り、シュラフに入り体を休める。夜半からアタックをかけ、2～3日間で頂上へ行くつもりだ。荷は全部で12kg程。13日午前1時起床。気温が高く雪が舞っているため少し待機し、午前3時50分に出発。どうやら私と同時期に入山したスイス隊(メンバー2名、シェルパ4名)もアタックをかけるようである。灯りのついている彼らのABCを過ぎ、ひとりノースコルへの取り付きへ向かう。取り付きには大きなデブリがあった。5日前、ここで韓国隊が雪崩に遭い、一人行方不明になっている。雪の状態が心配だったが今はよく締まっている。クレバスの開いた斜面をぬるように登り、午前7時20分ノース・コル(7,000m)に到着。途中から6名のスイス隊が追いついてきた。コルから先はなんと膝までのラッセルである。冷え込みは十分あるのに雪は全然締まっていない。これでは北西壁の方は危険も高く難しかったろう。チャンスはあったのではないか。ただ自分に力がなかつただけなのではないかという思いが重くのしかかっていたが、この雪の状態は私にアタックをかけなかった自分のフィーリングはけして間違っていなかったかもしれないと思わせてくれた。

デポした荷物をコルのテントから取り出しているスイス隊と別れ、私はひとり先へ向かう。ラッセルは深いが体調は非常に良い。ここでようやく北西壁ABCにいる優美とトランシーバーが通じた。後ろを振り返れば、チャンツェが朝陽に照らされ美しい。右手にはチョーオニー、ギャチュンカン、そしてプモリの頂上部分が雲海の上に姿をみせている。2時間程登ったところでスイス隊が追いついてきた。彼らの中の元気のいいシェルパ2人と交代にラッセルをしながら進む。

11時過ぎ、7,500m程のところでスイス隊は時間がかかりすぎていることや雪崩の危険を考え引き返した。ジャン(トロワレ)は私と一緒に引き返してまたアタックしようと声をかけてくれたが、私は下る気になれずもう少し登りながら状況を見てみることにした。確かに雪の状態はあまりよくない。しかし好天は続きそうであり、体もよく動く。しかも私はすべての荷をかついでいるため、引き返すにしても確実にデポできる地点(7,600m)までは行きたい。雪の深さは考慮に入れ、十分な燃料・食

1. 登山記録

料を持ってきた。天候さえもてば頂へ行けるかもしれない。北西壁で使えなかったエネルギーが今爆発しようとしている。慎重に雪の状態を確かめながらラッセルを続けてゆく。次第に傾斜が急になってくる。上方にスノードームのように盛り上がったピークがある。あの辺りまでゆけばとりあえずテントが張れそうだ。雪面を締まったラインを捜してみる。

午後1時10分。

突然、自分の回りの雪がまるで波のように上からゆっくりと動きだしてきた。「雪崩だ！」腰近くまで埋まっており簡単には身動きができない。直感的に少し右へ移動する。上部に亀裂がはいりドドーッと雪が落ちてきた。「助けてくれ！」と祈りながら雪崩の本流を避けながら右へと少し動く。その時、50m程上のスノードーム直下の雪面に亀裂がはいり大量の雪が大波のように落ちてくるのが見えた。その瞬間、私は覚悟した。もう左右に動いてしのぐレベルではなかった。スローモーションのように画面が移る。すぐに大量の雪にのみこまれる……。

不思議だ。こんなことってあるのだろうか。私の目の前で大量の雪は二つに分かれて落ちていった。さらに下方の雪を巻き込み激しい音とともにノース・コル近くまで雪崩れていった。上部にはすっぱりと板状に切れた雪面がむき出しになっている。私は少しも動いていない。なんだったのだろう。これはいったいなんだったのだう。

振り返れば反省することはいろいろとある。調子がよく、無理をし過ぎたようだ。まだまだあまい。この雪が落ち着くまで休養も兼ね、一旦ラサへ下ることにしよう。

9月23日、一週間ぶりにラサからBCへ戻る。この間山は強風が吹き荒れ他の隊はほとんど動けなかったそうだ。風が収まるのを待ち26日、ABCへ入る。そして翌午前3時50分、アタックに出発。今回は徹底的に軽量化を考え寝袋を省き、食料や燃料も絞りこんだ。午後0時30分、7,800mに到着。さっそくテントを張り休憩をとる。次第に風が強くなってきた。この風が収まらねば無酸素でのアタックは難しくなる。

午後7時、少し風が弱まってきた。もしかしたら頂上まで行けるかもしれない。さっそく準備をし出発。午後10時、8,000m地点に到達。ここで寒気と強風のため断念。頂きは今回も遠かった。

10月4日、BC撤収。

残念だった。だが、ヒマラヤ登山にはこんな時もある。

「なぜ登れなかったか」、そして「なぜ登るのか。」

ヒマラヤの大自然の中にただひとりあるとき、まさしく私は宇宙の中にあることに気づく。そしてこの宇宙のすべてのものは微妙なバランスで見事に調和しているのではないかと。私ももちろんその一部。ほんの一部に過ぎない。だがその調和を担うかけがえない一部である。そのように生きることは簡単なことではないだろう。登山を通して、頂きを目ざす行為の中に私はそれを求めているのではないだろうか。

(アルパインクラブF・O・S)